

きをし、泉石は十五歳江戸詰小姓以後蘭学に励んで日本有数の蘭学者になった。

泉石は信任の孫信頼を杉田玄白に入門の手引をし、河口信頼の長男信寛は杉田成卿に入り次男信久は伊東玄朴に入った。

今回の古河歴史博物館は鷹見泉石の大きな資料を主体とする鷹見記念館でもある。片桐一男教授が泉石学術調査団長に当った。

医聖田代三喜と河口家累代の相当の資料は、四年先の古河主催日本医史学会（京都→東京→金沢→古河）の折に展示

を約して貰っているが、今回の開館での医史学展示に与えられたスペースは雀の涙の為、河口信任の次の五点きり陳列させて貰えなかった。

○河口信任が明和七年四月二十五日首一屍体二に用いた解剖刀二振り  
 ◎河口良閑が河口良庵より頂戴の寛文六年阿蘭陀医学免許皆伝巻物一  
 ◎河口信任が長崎で栗崎道意より頂戴の宝曆十二年南蛮外科免許皆伝一  
 ◎河口信任著「解屍編」  
 ◎河口信任の古河時代書き付け金瘡縫様書類（南蛮流縫合、阿蘭陀十文字縫合の仕様を自筆解説の極意伝）一（写真）の計五点のみ展示してある。

河口家累代の資料は豊富につき筆者は、累代の数点ずつ位は展示を希望したが、館長から与えられた陳列場が小さ過ぎた。ただし山椒は小粒でもピリッと辛く見応えはある。

（川島 恂二）

尾台榕堂百二十年祭——顕彰碑落成

平成二年十一月二十四・二十五の両日、新潟県十日町市において、同地の生んだ尾台榕堂の没後百二十年祭が盛大に挙行された。

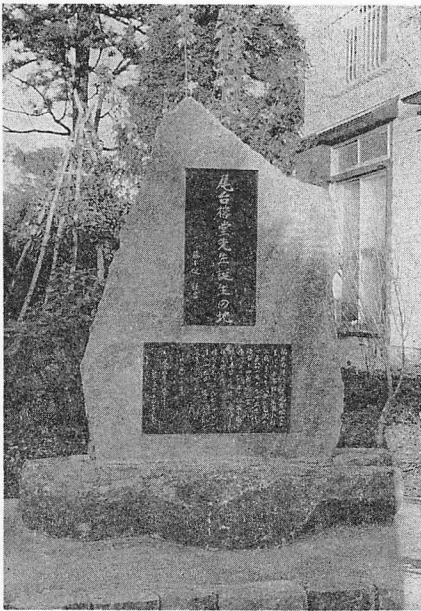
尾台榕堂（一七九九～一八七〇）。旧姓小杉、名は元逸、字は士超、通称良作。江戸に出て尾台浅嶽の門に入り東洞流古方を、

また亀田綾瀬に儒学を学んだ。浅嶽の没後、請われて養子となり尾台姓を襲った。代表作に『類聚方広義』ほか『方技雑誌』『橘黄医談』『重校薬徴』などがある。

この行事は十日町青年会議所のメンバーが中心となり約一年をかけて準備したもの。主催は尾台榕堂没後百二十年記念事業実行委員会（樋口熊蔵委員長）。

二十四～二十五日の二日間、市博物館では尾台榕堂以下、そのゆかりのある円通寺十四世住職惟寛禅師、亀田鵬斎・綾瀬、芳野金陵、浅田宗伯、小杉蘿斎、岡田雲洞・龍松、熊蔵、河本善夫、杉本周徳らの遺墨、榕堂の著述ほか数多くの史料を展示。本学会の矢数道明名誉会員をはじめとする来観者の目を引いた。

二十四日午後六時半からは市民会館において記念講演会、桂歌



助の記念落語と富山医葉大の土佐寛順氏の講演があった。

二十五日午前九時半からは、中条下町の榕堂生家跡、井口正平氏宅前で「尾台榕堂先生誕生の地」碑の建碑式。この碑は高さ一・七メートル、幅一・四メートルの安山岩に黒御影石をはめこんだもので、「尾台榕堂先生誕生の地」の文字は本学会会員の藤平健氏、碑文は榕堂の実家小杉家の親戚筋にあたる藤木秀三氏が揮毫した。式次第は、星名二郎氏の開会の辞、樋口熊蔵氏の式辞、藤平健氏らによる除幕、小曾戸洋の祝辞（矢数道明氏の祝辞も代読）、地元中条中学校生徒代表による感想文朗読、同中学校女子ブラスバンドの演奏と続いた。

次いで午前十時半から中条中町の円通寺で追善法要。スライドによる経過報告、法要儀式、樋口・藤平両氏の献辞、そして地元保存会による「大の坂」献舞と続き、最後に渡辺賢一住職、尾台家の子孫高橋敏弘氏、青年会議所の尾身孝昭氏が挨拶の辞を述べた。

さらに午前十一時からは同寺別棟の大広間にて祝宴。市議、市長、県議、地元名士らが次々と挨拶の席に立った。日本医学史学会からは蒲原宏常任理事が二十五日朝からの行事にかけつけ、この場において祝辞を披露、列席者の関心を集めた。最後に吉村重敏氏が挨拶を述べたが、同氏以下地元青年会議所のメンバーの熱意と行動力が今回の行事の成功をもたらしたものといえる。

なお、この行事に関しては東亜医学会の機関誌『漢方の臨床』三八巻二号に報告、また尾台榕堂の特集が組まれる予定となっている。

（小曾戸 洋）